

# OKoTaC 通信

2017年1月15日発行

## NO.32

### オコタック



#### P 2-3 NPO活動報告(1)

『多文化にふれる えほんのひろば 2016』

『外国人家族のための高校進学説明・相談会』

#### P 4 多文化な子ども@大阪のニュース

『平和と共存のための おまつり地球一周クラブ』

『世界のあそ VIVA!』

#### P 5 Air Mail メキシコ便り⑩

『フチタン(後篇)』

#### P 6 NPO活動報告(2)

『多言語マルチメディア DAISY 絵本「てんとてん」作成』

#### P 7 特別寄稿

『日本語指導が必要な生徒のための教材開発(2)』

#### P 8 イベント情報





## おおさか子ども多文化センター 活動報告(1)

### 『多文化にふれる えほんのひろば 2016』

～出会ってわくわく！いろいろなおはなし、せかいのいろいろなおともだち～

(子どもゆめ基金助成活動)

10月15日(土)と16日(日)、西区の大阪市立中央図書館にて、標記イベントをおこないました。地域に住む外国から来た親子に母語の絵本を楽しんでもらうと同時に、日本人には身近な多文化の存在にふれてもらおうというこの企画も、今年で開催5年目です。会場には、日本語・外国語あわせてこれまでで最多の23言語、約750冊の絵本を展示し、両日でのべ1400人あまりの参加がありました。

恒例の「多言語おはなし会」では、計6言語の外国人スタッフに、それぞれの母語で読み聞かせをしてもらいました。日本の絵本の外国語版だけでなく、カーニバルの準備に奮闘する女の子を描いたブラジルの絵本や、日本の端午の節句の元にもなった中国の「端午節」の楽しみ方がわかるおはなしなど、各国の文化や雰囲気になれることができる個性豊かな外国の作品も並びました。そして朗読だけでなく、その物語の背景や母国の風習も楽しそうに解説してくれるスタッフの話に、参加者は興味津々で聞き入っていました。

そんな中でも今年は読み手として、子どもたちの活躍が光りました。ベトナム人のママが朗読する紙芝居では、日本生まれの小学生

の娘さんが、感情もたっぷり日本語での要約をつけてくれました。また、日本語と外国語で交互に絵本を読み進む「掛け合い読み」では、英語やポルトガル語の部分をイギリスやブラジルにルーツを持つ子どもたちが担当。事前にお家の方や母語教室の先生と一緒にテキストの翻訳も手がけ、一生懸命練習してくれたという彼らの、照れくさそうながらも堂々とした朗読に、参加者は皆ぐっと引き込まれていきました。そして、読み終わったあとの会場にあふれたあたたかい拍手と笑顔を見ながら、外国ルーツの子どもたちが「日本語の不自由な子」ではなく、「もう一つ外国語ができる人材」として自分らしさを発揮できる、そんな機会の意義をあらためて思いました。

「おはなしと音楽でフィリピンを感じてみよう」では、関西在住のフィリピン人やその子どもたちで作るグループ「フィリピン・ダンス・カンパニー」の皆さんが、フィリピンで人気の絵本の読み聞かせや、伝統的な踊りを披露してくれました。最後には日本人のお客さんも前に出て一緒にバンブーダンスに挑戦。ともに笑顔で踊る中で、フィリピンという国を一気に身近に感じる事ができたのではないのでしょうか。

また今回初めての企画として、「おはなしを聞いて、みんなで一緒に絵をかこう」を実施しました。オコタックが9言語に翻訳した大阪市の人権絵本『てんとてん』を多言語で読み聞かせた後、そこから自由にイメージを膨らませて絵を描くワークショップで、2日目には原作者のすぎもとれいこさんも来場くださいました。同じおはなしをいろいろな言語で聞いたさまざまな国の子どもたちが、自然に一つの机を囲んで一緒にお絵かきを楽しんでいる様子に、絵本の持つ「人と人とをつなぐ力」を感じることができて、嬉しくなりました。



ブラジルやフィリピンの絵本を笑顔で紹介する高校生たち。



日本の子どもとブラジルルーツの子どもが、それぞれの言語で掛け合い読み。

さらに、昨年外国人スタッフからの発案で始まった、フロアで複数の言語のスタッフが組んでおこなう「多言語読み語りライブ」では、今年も会場のあちこちで絵本をはさんだ交流が生まれていました。特に今回は、福井高校で学ぶ外国ルーツの生徒たちもスタッフとして手伝いに来てくれて大活躍。中国語やポルトガル語、英語、ネパール語等で楽しく絵本を紹介してくれる「おにいちゃん・おねえちゃん」に、すっかりなついて離れない日本の子どももいました。

参加者、スタッフ、それぞれにとって、さまざまな出会いにあふれた2日間となりました。ボランティアのお一人が感想を寄せてくださいましたので、紹介します——

## 「多文化にふれる えほんのひろば」に参加して――

(ボランティアスタッフ 問谷 尚美)

今年で4回目の参加になります。今思うに、初めてお誘いを受けたときに断らずによかったと思います。多文化！…私は何語も話せないし、失礼があつてはいけないしと、しり込みするタイプです。しかし、子どもが好きなら大丈夫、絵本が好きなら大丈夫と、背中を押されてボランティアを始めました。

会場が図書館だからでしょうか、穏やかな時間が流れています。ドキドキしながら多言語ライブをしたり、お父さんの膝の中で絵本を見ている子どもの笑顔に感動したり、大人の方に「読み聞かせありがとうございます」と、お礼を言っていたいたり、外国語スタッフの流暢な日本語にびっくりしたりと…刺激いっぱいの日でした。絵本作家やアジアの高校生たちにも会えました。フィリピンのことも、少し知ることができました。

このひろばの一期一会に感謝して、また参加できれば嬉しく思います。



フィリピン・ダンス・カンパニーによる  
“花のおどり”

★ ★ ★

この5年間、「多文化にふれる えほんのひろば」を実施する中で、親子で一つのものをともに楽しむ時間、国籍や世代を超えた交流など、絵本から本当にたくさんのもを受け取りました。特に、スタッフとして関わってくれた外国ルーツの子どもや保護者たちが「また母語で読み聞かせしたい」と言ってくれることはことのほか嬉しく、生き生きとした彼らの姿に、母語や母文化の発信を通じて自分らしく活躍できる場を提供することの大切さを思います。また日本の子どもたちにとっても、偶然手にした1冊の外国の絵本から、それを読んでくれたスタッフさんとの顔の見える交わりの中で、世界にはいろいろな言語や文化や考え方があることを学び、その一つひとつがかけがえのないものであることを体感でき、絵本は大きな出会いの第一歩になり得るということを実感しました。

多文化共生の社会をめざす中で、いろいろな人がそれぞれの方法で楽しめる、親しみやすい絵本というツールだからこそ提供できるさまざまな可能性を、これからも大切に温め、広げていければと願っています。 (A. N)



## 「外国人家族のための高校進学説明・相談会」開催

11月19日(土)、天王寺駅近くにある阿倍野市民学習センターで、外国人保護者のための「高校進学説明・相談会」をオコタックが主催して実施しました。内容は昨年に引き続き、通訳をつけての進学ガイダンスで、中国、フィリピン、ボリビア、ロシアのルーツをもつ生徒と保護者が22名、通訳6名、先輩高校生2名、教員・スタッフ7名の参加があり、来年度の高校入試制度、高校の様子や受験の手続きなどについて具体的な説明を聞ける会になりました。

まず最初は、2017年度の「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒」や「海外から帰国・入国した生徒」のための選抜制度や、特別な対応についての説明がありました。続いて、中国ルーツ、ネパールルーツの2人の高校生に、高校入試のためにがんばったこと、悩んだこと、今の高校生活についてなど、先輩としての体験談を話してもらいました。参加者は、2人の話に真剣に耳を傾けていました。その後グループに分かれて、高校教員、中学校教員、支援者、スタッフが、情報を確認しながら参加者の質問に一つずつ答えていきました。中には、相談に行った行政窓口でのつれない対応に、子どもの進学先を見つけられず悩んでいる家族がいたりして、参加者からは、分からないところを丁寧に説明してもらって良かったという声をもらいました。外国から来た人にとって、日本の学校制度・入試制度の理解は難しく、通訳をつけて、適切な説明をうける機会が特に必要であることを改めて感じました。そして、日本の高校への入学を考えている子どもたちは、これからの日本社会の構成員になっていくのだということを、みんながもっと意識して、社会で育てていかななくてはならないと思いました。

(Y. M)





## 多文化な子ども@大阪のニュース・・・・・・・・・・・・・・・・

### 『～平和と共存のための～ おまつり地球一周クラブ「ルーマニアのこどもたち」』

(とよなか国際交流協会)

とよなか国際交流協会では、近隣地域に住む外国人を講師に迎えて、様々な国や地域について学び体験する、小中学生対象の「国際理解プログラム」を月1回実施しています。

11月26日(土)は、ルーマニア出身のマリア・ポポヴィッチさんが講師で、『ルーマニアのこどもたち』をテーマに楽しい時間を過ごしました。子どもは17名参加しました。

マリアさんはスライドを映して、ルーマニアの食事やお菓子、風景や動物、学校の様子等をクイズをまじえながら、丁寧にお話をしてくださいました。ドラキュラ城の説明では、子どもたちからザワザワとした反応がありました…。

さらに、ルーマニアのアルファベットで自分の名前を書く体験や、ボールを使ったゲームを楽しんだ後、ルーマニアのクリスマスではお馴染みのジンジャークッキーのデコレーションにチャレンジ。様々な形のクッキーはマリアさんのお手製です。アイシングやチョコレート等を使って、子どもたちは自由に飾り付け「おいしいねー」と笑顔があふれていました。

テレビやインターネットで外国の情報が簡単に手に入る今、実際に「出会い、知り、体験をする」からこそ残るものを大切に、これからも毎月、ドキドキワクワクの企画をしていきたいと思います。

(とよなか国際交流協会 大庭みゆき)



### 『あそびを通して世界に出会う！ 世界のあそ VIVA！ in 箕面市』

(箕面市国際交流協会)



箕面市で毎年開催されている多民族フェスティバル(主催:箕面市国際交流協会)に、今年は新コーナー「世界のあそ VIVA！」が登場しました。これは外国人市民と国際交流団体が世界各国のあそびや文化を子どもたちに教えるというもの。今回は12か国の遊びを体験できるコーナーが設けられました。

「巨大ユンノリ(韓国のすごろく)」では、子どもたちが自分の腕くらいある大きな棒「ユ」をかいっぱい投げて対戦。勝者に贈られる韓国のりを目指して熱戦が繰り広げられました。その他にも、タイの遊び「イガーファクカイ(チームでたまごを守ろう)」や、エジプトの〇×ゲーム「シーガ」、ガーナの足じゃんけん「アンペ」、ロシアのゴムとび、ブラジルのあそび「モルト・ビーボ」など楽しい遊びがいっぱい。どのコーナーでも、子どもたちは大喜び、見ている大人たちも笑顔に。約250人の参加で会場は大きな歓声に包まれました。

今回、遊びを教えてくれた人たちは、市内の小学校で国際理解の授業を行うゲストティーチャーでもあり、当日は箕面市在日外国人教育研究会(市外教)の先生たちがサポート・スタッフとして活躍。外国人市民と先生たち、子どもたちや地域の保護者たち、その出会いが多文化が輝く地域づくりにきつとつながる。そんな希望を感じる楽しい一日となりました。

(箕面市国際交流協会 河合大輔)



海外からのたよりをお届けします～

## メキシコ便り③⑩ 「フチタン(後篇)」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

次の日の朝、音楽隊を先頭に、手に手に昨夜作った椰子の十字架を持って信者たちが町中を練り歩きます。1時間ほど歩いたあと教会でミサがあり、そのあと、みんなに大きな魚のフライと野菜、フリホーレス(豆をぐつぐつに煮たもので、甘くないあんこのペーストみみたいなもの)、芋や果物の甘煮がのったお皿が配られました。ひとりのおばさんが私にもビールと一緒に渡してくれました。なんだか部外者なのに申し訳ないと思いつつもおいしくいただきました。ベラクルスから親戚が暮らすフチタンに休暇で来たというディエゴさんという話しながら食べ、このあと彼にパンテオン(墓地)に行つてごらんといわれ、行ってみました。

パンテオン一帯はまるでお祭りのように露店が並び、小さく仕切られた各墓地はいっぱいの花で飾られ、その前で家族が飲んだり食べたりしています。墓石の前では楽団がにぎやかな音楽を奏でています。きれいな



刺繍の民族衣装を着たおばあさんが2人、お墓の前に座っていたので写真を撮らせてもらおうと話しかけると、缶ビールとイグアナの入ったタマーレス(とうもろこしの粉を練って中に肉などを入れ、とうもろこしの皮に包んで蒸したものを差し出してくれました。イグアナはここではポピュラーな食べ物で、私はもちろん初めてでしたが、やわらかい鶏肉のようで、なかなかおいしかったです。これもありがたいながら、ここでも女系社会について聞いてみました。夫が早くなくなったので7人の子どもを女手ひとつで育てたというアイダさんは「女系社会、そうだね。男はみんなアメリカ合衆国に出稼ぎに行くからね。残るのは女ばかりだから」という答え。「うーん？ちょっと違うなー」と思いつつもお礼をいって別れました。このほかにもいろいろな人に聞いてみました。観光事務所のネレイダさんは「女系社会は伝説でしかないです。ここでは男も女もともに働きお互いがお金を平等に出し合っています。どちらかが主導権をもっているということはありません」と共同性を強調します。うーん、そこで男性にも聞いてみよう、市庁舎に行き、フチタン市長の秘書・ビルヘリオさんにも聞きました。すると彼は「残っていますよ。現に僕の家がそうです。女性は強いですからね」と。このいいかたはなんだか冗談半分のような気がするし、多くの人に聞けば聞くほどわからなくなりそうなので、もうこのあたりでやめることにしました。ただ彼らの話を総合すると女系家族も少しは残り、女性の就業率は高く、経済力のある女性も多いので、ここフチタンでは女性が力を持っているといわれるのかもしれないな、などと今までに聞いた話をいろいろ思い巡らしながらパンテオンを歩いていると、にぎやかなランチェーラが聞こえてきました。

その音楽につられてコンサート会場に入ると、またしても「ビール飲む？」と女性が聞いてきます。うなずくとビール瓶が渡されました。2本飲んだあと、「いくらですか」ときいても「いいよ、これはあつちの男性の一箱分の中からだからお金はいらない」といわれます。結局その男性にお礼をいって会場を出たのですが、今日は朝からいっぱいビールを飲んだにもかかわらず、すべておごりでした。本当になんて気前がよくて親切な人ばかりの町なのだろうと感動してしまいました。

そういえばここでは私が外国人であるということを忘れさせてしまう心地よさがあります。誰も私を特別視しないのです。むこうからやってきて質問攻めにすることもありませんが、じろじろ好奇の目で見られることもありません。人々の視線が自然なのです。でもこちらから声をかけるととても親切に対応してくれますし、目があうと必ず笑いかけてくれます。きっとこのような、人に対する自然ななげなさがムシエの人たちが住みやすいと感じるゆえんなのでしょうね。結局私の女系社会に対する疑問ははっきりとは解明されませんでした。フチタンがとても居心地のいい町だということだけははっきりわかりました。

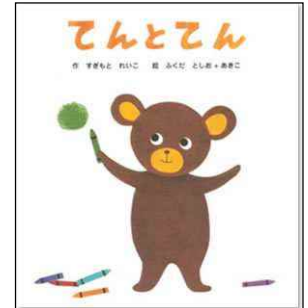


## おおさか子ども多文化センター 活動報告(2)

### 多言語マルチメディア DAISY 絵本 『てんとてん』作成しています

(DAISY 絵本作成コーディネーター 楓 彩織)

マルチメディアDAISYとは、文字を読みながら、同時に音で聴くことができる電子図書のことです。いま、日本で暮らす外国人家族は増え続けています。オコタックではそんな家族の間で母語を大切にしたいという思いから、“多文化共生”のテーマに即した絵本を多言語に翻訳、マルチメディア DAISY 版および YouTube 版を作成し、Web にアップしています。Web にアクセスさえすれば、多言語で絵本を読むことができます。私は今回初めてコーディネーターとして、この活動に関わらせていただきました。



多言語DAISY絵本として『ええぞ、カルロス』に続く2作目を、大阪府人権協会の 2016 年度人権NPO協働助成金をいただき作成することになりました。絵本は、平成 19 年度の大阪市人権絵本コンクール「はーと&はーと」入賞作品である『てんとてん』(すぎもと れいこ:作、ふくだ としお +あきこ:絵)を選び、10 言語(日本語、英語、中国語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語、フィリピン語、ベトナム語、インドネシア語、ロシア語)で作成しました。

この作品にはオノマトペ(擬音語・擬態語)がたくさん出てきます。毎年翻訳を担当されている慣れた翻訳者も多い中、翻訳会議では、このオノマトペをどのように訳せばいいのかということで議論が白熱しました。日本語はオノマトペが豊かな言語であるため、翻訳する際になかなか当てはまるオノマトペ的な言葉が見つからないのです。

例えば、クレヨンで点を書く「ツン、ツン」という音。この音は『てんとてん』の中に何度も出てくるので、この翻訳がとても重要になってきます。当初は日本語の「ツン、ツン」を生かそうか、もしくはリアルな音源を使おうかという案も出ま

ましたが、そうした場合他の母語話者には何のことかわからない可能性もあり、またリアルな音では絵本の雰囲気壊れてしまうおそれもあります。議論を重ねた結果、「ツン、ツン」にあたるオノマトペがある言語はそれで訳し、ない言語は絵本全体の雰囲気を考えて、わかりやすい音を当てようということになりました。この作業は翻訳者の感性に任されるということもあり、翻訳者たちは楽しみつつ、しかしかなり頭を悩ませながら翻訳したようです。

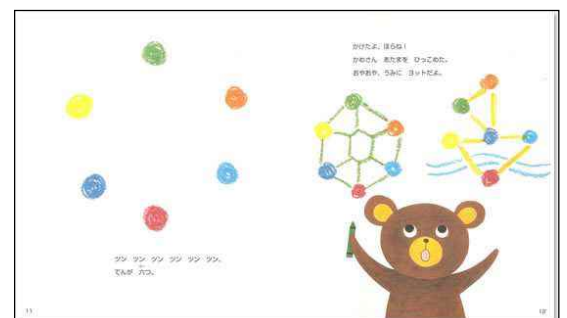


ロシア語の音訳(録音)風景

さて、その翻訳のできあがりは…というと、こちらはぜひ完成品で確認していただきたいのですが、いろんな言語を比較するとかなりおもしろいです。例えば、先の「ツン、ツン」は、スペイン語では「テン、テン」、ポルトガル語では「トゥム、トゥム」、インドネシア語では「ティック、ティック」、ベトナム語では「チャム、チャム」といった具合に訳されています。これをまた実際に母語話者が声に出

して読むと、その国の雰囲気が味わえます。マルチメディアDAISYの製作と普及活動をされているグループ“ふじつぼ”のご協力のもと、すでに録音も終わっていますが、同じ絵本でも言語によって世界観が違い、私は全言語の録音に立ち会いましたが、毎回新鮮な気持ちで聞くことができました。

残すは(公財)日本障害者リハビリテーション協会に EASY READER というDAISYを読みやすくするソフトを付けていただくことと、多言語絵本の会 RAINBOW の代表・石原弘子さんに YouTube にアップしていただくことです。外国にルーツを持つ子どもたちと関わっている方にはもちろん、多言語に興味のある方にはぜひ見ていただきたいです。たとえ言葉がわからなくとも、それぞれの国の雰囲気を感じ取っていただくことができると思います。



3月の完成をお楽しみに！



## 特別寄稿 『日本語指導が必要な生徒のための教材開発(2)』

—教科学習につなげるための日本語指導教材の開発と実践—

有本昌代(大阪府立門真なみはや高等学校教員)

### 2. 「教科学習につなげる内容重視の日本語学習教材」の開発

#### 2-1. シラバスの特徴

前回に続き、ここからは日本語指導のシラバスの立て方の具体例を示したい。

##### (1) 横のつながり(日本語と他教科との学習)に関連を持たせるテーマや活動を構成する

例えば、高校1年次のシラバスで関連付けたのは地理、情報、生物、家庭科、国語、2年次では歴史、国語、理科、美術、3年次では就職・進学、国語、政治経済、理科などの教科と主に関連性を持たせている。中でも国語関連では伝記、説明文、詩、物語など様々なジャンルの読み物を通し、読む活動を実施している。

教科学習の際に高校の授業では中学校よりもより深い知識を学ぶことになるが、小学校や中学校で学ぶ基本的な知識や語彙を知らないまま学ぶよりも、日本語指導を通し、その基礎となる教科知識を盛り込んだ読解教材を使い、日本語と教科の語彙や知識を学ぶことで、高校の教科の学習への橋渡しとなり、教科学習への自信や動機付けにも繋がっている。さらに、複数の教科を横断的に融合させることで、学びを深めることも特徴の一つである。

##### (2) 縦のつながり(1年～3年生の学習内容)を考え積み重なるテーマを構成する

現時点では、学校における日本語指導の体系だったシラバスや教材というものがなく、各々の学校や担当者がその場その場に応じて対応しているというのが現状である。

なぜこのような現状になっているのかというと、高校生にふさわしい日本語教材や抽出授業の教材がないことが原因といえるが、そのほかにも入学時の外国人生徒の日本語のレベルに毎年差があり、そのため統一の教材を設定できず毎年異なった教材を使うこと、さらに担当教師が変わることで年度ごとに教材が変わることもあり1年間に学んだ学習内容が次年度にスムーズに引き継がれないことで、3年間の学習計画を効率的に立てられないという現状がある。また、同学年におけるクラス間においても生徒の日本語レベルが異なるため、学習内容の照らし合わせができないことも原因し、他のクラスでどんな内容を学習しているのかわからないという問題もある。そして、日本語指導を担当している教師が非常勤の場合、引継ぎの時間がとれないため、どんなテキストを使って、どんな文型を学習したのか把握できていないケースも多い。

しかし、このような現状のなか、限られた時間で日本語能力を効果的に育成するためには3年間の体系だったシラバスを立て、効率的効果的に教材を活用して指導にあたることが重要である。そのため各学年で学んだ内容を積み重ねて学習できるようにシラバスを工夫した。

例えば、1年生では基礎編の『昔話』のトピックで物語の基本的な起承転結を学び、2年生では応用編の『小泉八雲と日本文学』のトピックで小泉八雲の『怪談』の作品を読み、登場人物の役割を理解し、あらすじをまとめる。3年生では『舞姫』を用いて、森鷗外の人生と物語の主人公との共通点や、心の動きを時代背景とともに学習する。このように、「物語」というジャンルにおいて、1年生では基本的な起承転結、2年生では登場人物の役割、3年生では時代背景と作者と主人公のつながりをふまえて「物語」について学習内容をレベルアップさせて力を付けられるように、シラバスを組み立てた。(次号に続く)



2016 年度第 3 回「外国にルーツを持つ子どもの教育支援学習会」

『学校生活からみえる外国にルーツのある子どもたちの抱える課題  
～ スクールソーシャルワークの視点から ～ 』

(大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業)

【講師】 佐々木千里さん(スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザー)

【日時】 2月19日(日)13:30～16:30 (受付13:00～)

【場所】 大阪市立阿倍野市民学習センター 第2研修室

(大阪市阿倍野区阿倍野筋3-10-1-300 あべのベルタ3階)

地下鉄谷町線「阿倍野」駅⑦出口より直結、御堂筋線・JR「天王寺」徒歩8分

近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」駅より徒歩8分

【参加費】 500円(オコタック会員は300円) 【定員】 50名

【対象者】 学校教員、地域の支援者、外国にルーツを持つ子どもの教育に関心のある人

【申込み】 2月10日(金)までに、Fax または E-mail にて、下記オコタックまで申し込んでください。

※ スクールソーシャルワークとは、「問題を抱えた児童生徒に対し、当該児童生徒が置かれた環境に働きかけたり、関係機関等とのネットワークを活用したりするなど、多様な支援方法を用いて、問題解決への対応を図っていくこと」(文部科学省)



事務所近くをちょっと寄り道 ～大塩平八郎終焉の地～

事務所のある本町付近には訪れてみたい場所が多数あります。たとえば鞆公園などは四季折々の変化を体感でき、市民や周辺のビジネスパーソンの憩いの場となっていますが、事務所から100Mほど北西に離れたところには『大塩平八郎終焉の地』の石碑が立っています。大塩平八郎はご存じの方も多いと思いますが、幕末のころの大坂町奉行所の元与力でした。

この頃は「天保の飢饉」といわれる大飢饉が続いていた時代です。米不足で、庶民が食うや食わずの生活を強いられていたにもかかわらず、幕府役人や商人の不正が横行していました。体制側の官僚としてその様子を間近に見ていた大塩は不正を追及するため起ち上がりました。しかし蜂起そのものは約半日で鎮圧されてしまいます。私財をなげうち不正をただそうとした

行動は人々の心を打ち、大塩が発した「檄文」とともに、その蜂起の影響は全国に波及しました。そしてこのことは江戸幕府崩壊を早めた一因ともいわれています。大塩は自分の主張を貫くため、権力に立ち向かいました。後の「維新」の立役者と呼ばれた人々のように決して権力を求めようとはしなかったのです。事務所にお寄りの際は少し足を伸ばして石碑を訪ねてみて下さい。

あなたも弱者のために歴史を動かした人物の息づかいを感じてみませんか。



NPO 法人 おおさかこども多文化センター (OKoTaC) 代表 濱名猛志

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com URL http://okotac.org

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜ 叶い叶い))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824

口座名義『NPO法人 おおさかこども多文化センター』

〔フリガナ: トクヒ〕オオサカコドモタブンカセンター

